

今村和彦作 「セルフイメージをぶち壊せ」

<前編>

- ナレーション 和美は15歳。青春中学の3年生。成績は中の下。同級生の雅彦君にひそかに思いを寄せているのですが、今のところ一方通行。甘いものが大好きで、最近ちょっと太り気味。どこと言って取り得のない、普通の女の子です。
- 和美 その和美が、ある日のこと、うちのお風呂場でヘルスメーターに乗りました。
- 母 イヤッだー！ 60キロ超えちゃった。どうしよう、どうしよう。雅彦君に嫌われちゃう。お母さん、お母さん！
- 母 なんですか、一体？ そんな大きな声出して。
- 和美 どうしよう。わたし60キロ超えちゃった。
- 母 どうしようって言ったって、仕方ないでしょ。甘いものばかり食べるからいけないのよ。これを機会にダイエットするのね。あんまり太っていると男の子にモテないわよ。つまらないことでいちいち呼ばないでちょうだい。
- 和美 余計なお世話ですよーだ。なんだい、チクショー、自分だっていい加減太ってるじゃないか。でも、「あんまり太っていると男にモテない」か…。やっぱりわたし、太りすぎかしら。
- ナレーション 和美は、フロから上がると、真っ先のお父さんのところに行きました。
- 和美 ねえねえお父さん。わたし、太ってるって。
- 父 どうしたんだい、急に？ そんなこと、自分で鏡を見てみりゃ分かるだろ。まあ、まだ小錦までは行ってないがな(笑う)。
- 和美 ひっどーい！ どうせお父さんはわたしのこと、デブだと言いたいんでしょ。分かったわよ。どうせわたしはデブですよ、デブ！（ワーと泣きながら2階へ）
- 父 おいおい、お母さん。どうしたんだい、あいつ？ ちょっとおかしいんじゃないのか？
- 母 あのこも年ごろなんですよ。お父さんも冗談が過ぎますよ。いくらなんでも“小錦”だなんて。傷つくわよ。
- ナレーション この日を境に、和美はやせる決心をしました。朝はサラダだけ、昼は抜き、夜はご飯1ぜん、間食なし…という生活を3日続けたのです。そして4日目の放課後――。
- 純子 ねえねえ和美。あんた最近元気ないじゃない。顔色悪いし、死にそうな顔してるわよ。
- 和美 そう…。純子はいいわね。悩みがなくて。スタイルもいいし。
- 純子 どうしたの、一体？
- 和美 ねえ、わたし、少しやせたと思わない？

純子 あ、分かった。あんた、ダイエットしてるんでしょ。やめときなさいよ。どうせあんたじゃ続かないんだから。

和美 どういう意味、それ？

純子 だって、あんた意志が弱いし、それに第一、もう手遅れよ。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション 純子はほんの軽い冗談のつもりだったのですが、“手遅れ”というその心ないひと言が、和美の心に深く突き刺さりました。

和美モノローグ 手遅れ。手遅れ…(エコー)。あんまりだわ。人がせっかく一生懸命やせようとしているのに。どうせわたしはデブでノロマで意志が弱くて、頭も悪いし、顔だって十人並みだし、何一つ取り得なんかないんだわ。わたしが逆立ちしたって、純子にかないつこない。だって、純子はスタイルはいいし、顔だってわたしよりずっとかわいいし、頭もいいし。雅彦君だってわたしみたいなデブでノロマな女の子より、純子みたいなこの方が好きに決まってるわ。あーあ、わたしって、どうしてこんなに醜いのかしら。何よ、このおなかの肉。見ともないったらありゃしない。あーあ、もう何もかもイヤんなっちゃった。バカバカしい。もうダイエットなんかやめた！ わたしはわたし。デブで醜い女の子でいいの。

ナレーション それからというもの、和美は猛然と食べ始めました。3日間のダイエットの反動も出たのか、見る見るうちに彼女の体重は増え続け、ついに1か月後には、70k までになりました。

純子 ねえねえ和美ったら。最近急に太っちゃって。どうしたのよ。そんなに食べてばっかりいと、本当に手遅れになっちゃうわよ。

和美 ふん、何さ。もうとっくに手遅れなんでしょ！ 今更何言ってんの！

純子 やーだ。和美ったらまだこの間のこと、怒ってるの？

和美 怒ってなんかいないわよ。むしろ感謝してるわ。おかげでいくらでも好きなだけ食べられるようになったもの。わたしはデブで醜い女の子。それでいいのよ。

純子 イヤな性格！ 人がせっかく好意で言ってあげてんのに。自分でそう思いたければ思っていればいいわ。もう知らないから！

和美 いいわよ。わたしが太っていようとやせていようと、純子の知ったことじゃないわ。どうせわたしはデブで醜い女の子。いいのよ、それで。ほっといてよ！

ナレーション 和美としても、決して太りたくて太ったわけではないのですが、スタイル抜群の純子と話せば話すほど、自分が惨めになっていくのでした。そして、不幸なことに、自分が“デブで醜い女の子”というセルフイメージが、頭にこびり付いて離れなくなってしまったのです。いつしか和美の快活さは失われ、学校へ行ってもだれと話をするでもなく、独りでふさぎ込む毎日が続きました。

(音楽) (沈み込んだ感じ)

ナレーション しかし、そんな和美の様子を心配そうに見ている一人の男子生徒がいました。

和美が以前からひそかに思いを寄せていた雅彦君です。雅彦君は、和美と一番仲のよかった純子に、そつと尋ねてみました。

- 雅彦　なあ純子。和美のやつ、最近ちょっと元気ないようだけど、どうしたんだい？
- 純子　あら、和美のことが気になるの？ それならそうと早く言ってあげればよかったのに。そしたらあんなにブクブク太らなくて済んだのよ。
- 雅彦　どういう意味だよ、それ？ おれと和美が太ったのとどう関係があるんだよ？
- 純子　大ありよ。和美は雅彦君のことが好きだったの。だのに雅彦君が和美のこと見向きもしないから、和美はふてくされて太ったのよ。
- 雅彦　そんなバカな話ってあるかよ。和美が太ったのがおれのせいだなんて。ふてくされて太るのは勝手だけどさ、いちいちおれのせいにされたんじゃかなわねえよ。
- 純子　今からでも遅くないわ。雅彦君、和美に「好きだよ」ってひと言言ってあげれば、彼女、絶対元気になるわよ。かけてもいいわ。
- 雅彦　勘弁してくれよ。おれはただ同じクラスメートとして、ちょっと心配だったから声かけただけだぜ。別に和美のことが好きでもなんでもないんだ。勘違いしてもらったら困るな。
- 純子　そう堅いこと言わないで。ねえ、和美を救えるのは、雅彦君だけなのよ。わたしがなんと言っても、もうダメなの。和美ったら、自分のこと“デブで醜い女の子”だって思い込んで、聞く耳持たないのよ。ねえ、和美を助けるとして…。
- 雅彦　困っちゃうなあ。同情で「好きだよ」なんて言えないよ。言えるとしたら、「和美は確かにデブだけど、そう醜くはないよ。」このくらいかなあ。
- 純子　そんなこと言ったらダメに決まっているでしょ。
- 雅彦　だっておれ、はつきし言って、太っている女の子、嫌いだもん。和美、昔は結構やせていてかわいかったけど、最近はブクブク太って昔の面影もないし。
- 純子　でも、和美が太ったのは雅彦君、あなたのせいだと言ったでしょ。あなたが責任持つべきよ。
- 雅彦　冗談言うなよ。和美が太ったのは自分の責任だろ。勝手に人のせいにするなよ。
- 純子　だけど、和美は自分で自分のこと“デブで醜い女の子”だって思い込んでるのよ。このセルフイメージを打ち破らない限り、彼女に救いはないわ。このままどんどん太り続けるだけよ。雅彦君、それでもいいの？
- 雅彦　それでいいも悪いも、おれの知ったこっちゃないよ。だけど一体どうしてそんなセルフイメージに凝り固まってしまったんだろう。太ってさえいなきゃ、明るくていい子だったんだけどなあ。なんとかしてやりたいけど、おれには荷が重いな。悪いけど、何も聞かなかったことにしてくれよ。じゃあな。
- (音楽)　ゴスペルフォーク「だれも知らないわたしの悩み」

<後編>

- 和美 あーあ、なんだか何もかもイヤになってしまったわ。このごろ、わたし、デブなだけじゃなくって、ますます性格悪くなってきたみたい。話しかけられてもろくに返事もしないし、そう言えば、最近笑ったことなんてあったかしら。
- 里子 おはよう！
- 和美 …
- 里子 おはよう、和美さんってば！
- 和美 え？ あ、里子おはよう。
- 里子 今日、わたしね、家の近くの土手でスマレの花を見つけたの。とってもかわいくって、一生懸命咲いてて、なんだかうれしくなっちゃった。
- 和美 (気がなさそうに)そう…。
- ナレーション 和美がさりげなく里子の様子を見てみると、彼女は自分の席に着き、授業の準備をしながら、何やら口ずさんでいるようです。
- 和美 あの子はどうしてあんなつまらないことでうれしくなれるのかしら。わたしなんて、最近、何を見ても聞いても感動したことなんてないわ。里子は決して美人じゃないし、勉強だって大してできないし、どこにいるのか分からないようなおとなしい子だわ。わたしだって今まで彼女の存在を気に留めたこともなかったくらいなもの。でもあの子はちっともひねくれていないわ。
- 純子 おはよう！
- 和美 あ、純子。おはよう。
- 純子 今日はちょっと顔色いいんじゃない？ 昨日テレビでさ、やせるヨガ体操っていうのやってたわよ。今度見てみなよ。それとさあ、雅彦君があなたのこと心配してたわよ。最近元気ないって。
- 和美 もういいわよ、その話は…。
- 純子 あらそう。また余計なこと言っちゃったかな。じゃあ、またあとでね。
- 和美モノローグ 純子もわたしのこと心配してくれてるのよね。でも最近、彼女が何を言っても、いちいちカチンと来ちゃう。要するに、わたしがひがみ根性を持つてるからなんだわ。雅彦君が心配してるって？ どうせウソに決まってるわ。あーあ、またこれだ。本当にイヤな性格ね、わたしって。
- ナレーション 自分の殻に閉じこもり、“デブで醜い女の子”というセルフイメージで自分を縛り付けてしまった和美は、そのようにしか考えられない自分、物事をひねくって、ひがみ根性で見えてしまう自分の心の醜さに気づき始めました。
- 和美モノローグ わたし、このままではどんどん惨めになってしまうわ。でもどうすればいいのかしら。…そうだ、昼休みに里子と話してみようかな。「スマレの花を見ただけで、どうしてそんなにうれしくなれるの？」って聞いてみようかしら。

(効果音) (放課後のチャイム)

和美 ねえ、里子、ちょっといい？

里子 ええ。何かしら？

和美 あの…ね。あなた、今朝、「スマレの花見てうれしくなっちゃった」って言ってたでしょ？ どうして？

里子 どうしてって…。だってかわいくって。一生懸命咲いてるんだもの。

和美 うん…。わたしね、あなたがそういう小さなことで感動できるのはどうしてかなって思ってたのよ。わたしなんて、最近何見ても何聞いても感動しないの。毎日つまらなくて。

里子 小さなことだけどね。春には春の花が咲いて、鳥が鳴いて、雨が降って…。みんなすばらしいじゃない。花だって鳥だって、みんな精一杯生きてるでしょ？それがうれしいのよ。「わたしも頑張らなくっちゃ」なんて気にもなれるわ。

和美 いいわねえ。うらやましいわ。

里子 でもわたし、和美さんの気持ち、分かるわ。以前はわたしも、「つまんない、つまんない」って言い続けてたもの。

和美 え、それ本当？

里子 そうよ。わたしって目立たないでしょ。顔もスタイルもよくないし、勉強もスポーツもできないし、何やっても人並み以下なのよね。“わたしには何の取り得もない。わたしなんかいなくなつてどうってことないんだ”っていうコンプレックスを長いこと持っていたの。

和美 それ、わたしとおんなじ。そうなのよ、だからわたし、開き直って、“どうせわたしはダメだ”って決め付けてきちゃった。そうしたら、ちっとも楽しくないし、自分の性格がますます悪くなるのが分かって、つらくてたまらないの。

里子 そう…。“このごろ元気ないなあ”って思ってたけど、それだったのね。

和美 ねえ、それで、それで…どうして今のように変わったの？

里子 それはね。(チャイムの音)あら、もう時間だわ。わたし、うまく話せないかもしれないから、あとでお手紙書くわ。悪いけど、ちょっと待っててね。

ナレーション 次の日の朝、和美が学校に着いて靴を履き替えようとする、下駄箱の中に、里子からの手紙が入っていました。教室でそれを開けてみると、丸っこい字で次のように書かれていました。

里子 和美さんへ。わたし、話すのが得意じゃないから、お手紙にしました。実は今日、和美さんとお話しできて、わたし、とつてもうれしかった。だって、最近の和美さんたら、いつも沈み込んでいて、なんだか人が変わっちゃったみたいだったから。

(音楽) (ブリッジ)

里子 和美さん。今までクラスみんなにはあまり言っていなかったけど、わたし、最

近クリスチャンになったんです。クリスチャンになったって言ってもね、まだ洗礼を受けてるわけではないし、あることがきっかけで近くの教会に行き始めたばかり。でもね、神様を信じるようになって、わたし、変わったわ。それまではね、人と自分を比較して、自分はあれもできない、これもできない、なんの取り得もない、つまらない女の子だって思い込んでいたの。そしたら、本当に何もかもつまらなくなってしまうって、生きているのもイヤになったわ。でもね、ある時、ある人から、聖書にこんな言葉があるって聞いたんです。その言葉っていうのはね、「わたしの目に、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」っていう言葉だったんだけど、ここで“わたし”っていうのは神様のことなんだって。だから、ここで言われているのは、「神様の目には、わたしたちはみんな高価で尊い」ということ。わたしたちが、どんなに自分のことをつまらないとか、惨めだとか思っても、神様の目には、わたしたちは高価で尊いんだって。わたし、その話を聞いてハッと思ったの。わたしたち、普段は自分の目でしか自分のこと見ていないで、それで勝手に“自分はダメだ”、とか“自分はすごい”とか勝手にセルフイメージを作っちゃうんだけど、でも、それが本当の自分とは限らないんじゃないかしら。自分でいくら“自分はダメだ”と思っても、神様の目にはそうじゃない。神様の目から見れば、わたしは高価で尊い。神様はわたしのことを愛してくださっているっていうことが分かったの。そうすると、それまで自分は何の取り得もないつまらない女の子だって思い込んでいたのが、すごく楽になったんです。「わたしがたとえスタイルが悪くても、勉強やスポーツができなくても、神様はわたしを愛していてくださる。」そう思ったら、とても自由になって…。そして、何を見ても、何を聞いても、“神様のなさることはすばらしいな”って感動できるようになりました。

今日からわたし、神様に和美さんのことお祈りします。「和美さんが、昔のように元気になりますように」って。それではまたね。 里子

(音楽)

(BGM「だれも知らないわたしの悩み」、次第に高まって)

和美モノローグ

里子はクリスチャンだったの…。初めて知った。だけど、“神様の目には、わたしは高価で尊い”か…。わたしは、今まで自分のこと、“デブで醜い女の子”だとばかり思い込んできたけど、こんなわたしでも、神様の目から見ればそうじゃないのかしら。神様って、どんな方だろう。わたしも里子に頼んで、教会に連れていってもらおうかしら。

ナレーション

「こんなわたしでも、値打ちがある」と言ってくださる方が、本当にいらっしやるなら、自分も出会いたい。そして、里子が変わったように、自分も変わりたい。」里子の手紙を読みながら、和美は、自分の心の中に、少しずつ明るい光が差し込んでくるのを感じていました。――

<完>